慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ハインリッヒ・マンの長編『まじめな人生』における犯罪について
Sub Title	Über das Verbrechen in Heinrich Manns Roman ,,Ein ernstes Leben"
Author	坂口, 尚史(Sakaguchi, Naofumi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1992
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.60, (1992. 3) ,p.275(172)- 286(161)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	中田美喜教授追悼論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00600001-0286

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ハインリヒ・マンの長篇「まじめな人生」における犯罪について

坂　口　尚　史

1

長篇「まじめな人生」(Ein ernstes Leben 1932・Nov.) はハインリヒ・マンがドイツで執筆した最後の作品である。出版後わずか二ケ月の1933年1月ヒトラーが政権をとり、ハインリヒは亡命しなければならなかった。そして生涯二度とドイツの土を踏むことができなかったのであり、この作品はワイマル共和国時代最後の大きな散文作品であるとともに、大戦前にドイツで出版できた最後の作品なのである。[1] この本はまた1933年5月10日、ナチスによる焚書の際に焼かれた本である。[2] その理由は、「道徳的な堕落に反対！　風紀と家庭と国家のために！」[3] であった。たしかにこの小説はワイマル共和国末期の世相をとらえ、ヒトラーの権力掌握以前の数年間におけるドイツの道徳的頽廃を描いている。しかし、ナチスの言うように堕落を描くことが目的なのではなく、真に望ましい社会のあり方を訴えており、後に述べるように、刑事Kirschの行動と言葉に作者の望みが最も強く出ているように思われる。

「臣下」に始まるドイツ帝国三部作を、「頭領」(1925) で完成させたハインリヒ・マンは、いわゆる「ワイマル共和国時代の長篇」を四篇発表している。先の三篇は、Mutter Marie (1926)、Eugénie oder die Bürgerzeit (1928)、Die groβe Sache (1930) であるが、Eugénieだけは19世紀のリューベックが舞台であるから別として、「まじめな人生」を含めた三篇はいずれも、なんらかの形でワイマル共和国時代のドキュメントを内包したZeitgenössische Romaneであると言うことができる。視野を短篇にも拡

げると、ユルゲン・ハウプトが「インフレ小説」としてまとめている一群の作品があり、[4] それらの作品には、第一次世界大戦後のインフレによる世相の混乱と新旧世代の対立の問題、いわゆるGenerationsproblemが巧みに織り込まれている。また「七年」(1929) および「公的生活」(1932) と題された評論集があり、それらは長篇、短篇を含めたワイマル共和国小説の社会心理学的な注解となっている。小論では、「まじめな人生」[5] における登場人物たちの犯罪の問題と、それに関連して、警察および刑事に対するマンの視点をエッセイの中に求めたい。登場人物たちはいずれも、まじめに生きるMarieをも含めて、盗み、詐欺、強喝、嬰児誘拐、殺人といった罪のうちのどれかを犯すが、どのようにしてそうした犯罪が生まれるのかという問題である。

ハインリヒ・マン研究において、この小説を論じた論文は数少なく、概してワイマル共和国時代の長篇は重要な作品群として扱われていない。[6] むしろ弱い副次的な作品として過少評価されている。[7] それらは短期間にあまりにも性急に執筆され、作品構成上の不均衡についても作者自らが弟トーマス宛の書簡で述べており、[8] 全7章のうちの最後の二章においては、嬰児の誘拐や遺産をめぐる殺人といったKriminalromanのようなストーリーが転回される。無実の船乗りMingoに殺人の疑いがかかり、Marieと逃亡する最後の部分などもそうである。こうした通俗的な要素も作品評価に影響していると思われる。

しかし、作者は意識的に、Kolportageromanの要素をもつ作品を書いたのである。この時期のハインリヒ・マンは大衆小説にも関心をいだいているが、その創作意図から見ると、Kriminaromanは外観でありみかけにすぎない。その中味は社会批判であり、望ましい市民社会の追求である。ハインリヒを社会批判の小説と結びつけているものは、社会を描くことなくして理想的なデモクラシーを訴えることはできないという認識であり、真に民主主義的な社会を実現させたいという願望であった。推理小説的な要素はいわば作品をおもしろくする材料である。このことに関連してエッセイ「精神の状況」(1931) の中に次のような表現がある。

「探偵小説は役に立つものだ。なぜならおもしろいからである。それらはしかし、深い知識と善意ある意図で貫かれていなければならないだろう。既成の状況をあまりまともに受けとらないというすばらしい懐疑心が、探偵小説にはしばしばあまりにも不足している。つまり、我々には既成の状況を改善できるのだという信念が。」[9)]

この文はある講演の中の一節である。60歳を迎えた歳にハインリヒは、大衆小説を中心に話を進め、1930年の読者層に迎えられた小説を、戦争小説、探偵小説、社会小説の三分野に分け、戦争小説についてはレマルクの、とくに「西部戦線異常なし」について、探偵小説については当時人気のあったイギリスのエドガー・ワレースをとりあげている。上記の文はワレースの小説に対する批判の中で言われている。既にある社会の状況をそのまま受けとり、決して改善しようとしない作者の姿勢は、モラリストのそれではない。この点ワレースには「善意ある意図」が欠けている。ハインリヒのRomanは夢をこめたものとならなければならなかった。そこで選ばれた物語は、15年間扱ってきたドイツの市民や労働者の物語ではなく、後に彼の二度目の妻となったネリー・クレーガーの自叙伝にヒントを得た物語りであった。

2

ヘルマン・ケステンはその著、「私の友人、詩人たち」の中の「ハインリヒ・マン」の章で、ネリー・クレーガー[10)]から聞いたこの小説の成立に関するエピソードを伝えている。[11)] ホルスタイン地方の小さな村の生れで、家が貧しく苦労を重ねた末に、ベルリンのバーにつとめていてハインリヒと知り合ったネリーは、あるとき、自分の半生の物語を書いてみないかとハインリヒに言われて、「ひとつの風変りな物語」を書き上げた。ネリーはそれを出版したいと思ったが、ハインリヒにやめるように言われた。ハインリヒはストーブのそばで何回もその原稿を読んでいたが、突然それをストーブの中に投げ入れ、呆気にとられているネリーの前で新たに稿を起こして

この作品を完成したという。

ネリーの原稿がない以上、どこまでがネリーの書いた部分であったかを確認することはできない。我々はハインリヒによって完成された、多くのフィクションを含んでいるであろう物語、すなわちMarie Lehningの物語を読む以外にないのである。

Marieは美しく性質の良い少女であった。彼女はバルト海に面したWarmsdorfという漁村の、農事労働者の貧しい小農家で生まれた。村では「漁師は上の方の身分で、次に少しおいて商人、かなり下って農夫」そして農事労働者は「一番下の身分」[12]であった。彼女の人生のきびしい運命は、貧困と貧困への恐怖に起因している。父はアルコールにひたっており、あるときこの村を襲った嵐による高波で水死する。(第1章末尾)。数多い妹たちの何人かは、事故で水死したり、愛の裏切りにあって自殺に追い込まれたりした。母は働きすぎて過労のため病気になって死ぬが、Landarbeiterinとして母のような人生だけは送りたくないとマリーは思った。母の人生は、「働き、見捨てられ、飢え、他人のために気を遣い、決して明日を知らず、最後には死ぬ」[307] 生き方であった。

マリーが8歳ぐらいの頃、富裕のMeier一家がベルリンから避暑にやってきた。この一家の双子の姉弟Viktoria (通称Vicki) とKurtとは悪い因縁の出会いであった。第一次大戦後のインフレが二人の両親に巨額の富をもたらし、双生児も成り上り者の子供で性質が悪く、マリーはつねに彼らのからかいまたは悪ふざけの対象であった。二人にとって人生はいつもspielenであり、人生のErnstは無縁であった。それに対して、村では良い方の階層に属している漁師の息子で、マリーより少し年上のMingo Mertenは、性格は弱いながらも優しい心の持主であり、彼女の恋人となる。誤解があってマリーは心ならずもクルトの子供を産むことになるが、後にベルリンのバーにつとめるようになってからも、ミンゴへの想いが彼女を堕落からまもることができた。

14歳で父をなくしたマリーは、リューベックで仕立てのアルバイトをす

る「逢い子」として生計をたてることになるが、このときまだ海に出るつもりがなく、やはりリューベックに指物師の見習いにきていたミンゴといっしょに暮す。16歳までの逢い子の時代が彼女にとって最も幸福な時期であった。その幸せの頂点に故郷から母倒れるの知らせが入り、彼女はやむなく再びバルト海岸の故郷にもどり、ある農家に住み込んでLandarbeiterinとして働き、妹たちの面倒をみなければならなくなる（第2章）。

一方、ベルリンではマイヤー一家の両親が、インフレで儲けた財産をなくし、双生児はすぐ大都会の「暗黒街」に入っていた。ヴィッキーは法律顧問Bäuerleinの妻におさまっていたが、蔭で弟をあやつり、盗みをさせる。クルトは警察の追求を逃れて、マリーのいる漁村まで逃げてきて隠れている。ここで18歳のマリーは、17歳のクルトと偶然に出会ってしまった。折しも、ミンゴはマリーにひかれながらも、マリーの生き方を理解できなくなって、彼女のもとを去って船員になるため長い航海の旅に出ようとしていた。マリーは泥棒であり、ならず者であるクルトの子供を産む。マリーはクルトを愛していなかったのに、クルトのために気を遣い、漁村での生活に耐えられなくなったクルトがベルリンへ帰るにあたって、彼にそそのかされて紳士用の履き物を盗む。クルトはマリーと子供を残してベルリンへ逃亡した。万引きの罪でマリーは逮捕され、警察の拘置所で一晩を過した翌日、禁固4週間の判決にたえかねてリューベックの駅で列車にとびこむが、幸い助けられる。このときの体の傷は、心の傷とともにあとあとまで残った。このあたりからマリーの人生は大きくくずれていく。

第三章の終りに当るマリーの犯罪の場面は小説全体の中で重要である。社会批判をテーマにしたこの小説における犯罪者には二通りあって、クルトのように根っから性質が悪いタイプと、追いつめられた状況の中でやむにやまれず罪を犯してしまうマリーのタイプである。後者の犯罪の動機こそ小説のテーマに他ならない。ハインリヒ・マンは先に引用したトーマス・マン宛の手紙の中でこう述べている。「私はいつも犯罪（das Verbrechen）にぶつかります。犯罪は、人間的にも社会的にも一つの力となったのであり、それを我々は今やっと知ることを学びます。」ハインリヒに

とって犯罪は社会と結びついたものでなければならなかった。エッセイ「精神の状況」の中で彼は、「ワレースの小説の多くの犯罪者たちの狂気は医学的（精神異常の）要素をとり入れており、社会から生まれたものではない[13]」ことを強調してこれを退け、バルザックの小説における犯罪者こそ、自分が描きたい犯罪者のタイプであるとしている。ハインリヒ・マンをバルザックと結びつけている決定的なポイントは、人間存在の死活にかかわる状況への洞察である。罪は人間の運命の回避しがたい構成要素とみなされており、罪がこの小説においては「ただ一つの可能な存在形式[14]」になっている。

リューベックの駅からマリーを病院へ運んだ人物は、偶然そこにいあわせたヴィッキーであった。マリーは盗みの罪のため故郷へ帰ることもできず、子供とともにヴィッキーによって首都ベルリンへつれていかれる。首都はどのようにマリーを迎えたのであろうか。都会には性悪な人間たちがいて、マリーはかつて一人で考えたように、敵対する人たちの「玩弄物」[351] になってしまう危険性があった。他方彼女は都会人にはない「内面的な強健さ[15]」と「純真さ[16]」をもち合わせており、彼女の長所がうまく発揮されれば幸福な市民生活をつかむことができるかもしれない。緊張をはらみつつ第4章が始まる。

3

ベルリンでの事件にふれる前に、この小説の影の主役となっている刑事Kirschについて述べなければならない。キルシュについて作者は、「彼はこの小さい世界における天意を代表している[17]」と述べている。マリーは故郷にいた14歳のころ、Boldtという男の家に放火しようとしたことがあった。その男が恋人であったマリーの妹を捨てて他の女に気持が移ったため、妹が自殺に追い込まれたからである。放火の計画を進めていたマリーは海岸で大きな男に会った。男は「何か重くて、どっしりとしていて、たくましいもの」[260] であった。しかも男はマリーの計画を知っていた。こうしてマリーの最初の犯罪を防止することによって、キルシュは

この小説に登場し、最後にマリーの自殺をとめたのであるから、マリーの「守護天使」と言われるのも当然である。[18)]

マリーとの最初の出会いから4年ほどして、キルシュは再びベルリンからマリーの村へやってくる。クルトがベルリンのバー経営者Adele Fuchsの自宅に押し入り、青い大きな宝石を奪った疑いでクルトを追ってきたのであったが、その時は証拠品をつかめず、いったんひき上げた。第4章において、刑事はヴィッキーの家に現れる。盗品をもっていた彼女は危険を感じて、マリーの縫い物の籠にそれを入れておいた。それがアデーレによって発見され、そのきっかけでマリーは彼女のバーで働くことになる。

第5章以降マリーはバーの女である。彼女はしかし、大都会の悪い環境に染まらなかった。「また帰ってくるよ、マリー！」[326] と言い残して航海に出ていったミンゴへの愛と、MingoのMiをとってMichaelと名づけた赤子への愛が彼女を支えている [349]。[19)] マリーがクルトの子を産むことを知ってもミンゴにはマリーへの未練が残った。ヴィッキーはマリーの純真さを以前から憎んでいた。自分が子供を生めない体であることも手伝て、クルトがマリーにうませた子供を許すことができなかった。ヴィッキーは他人をそそのかすことにたけており、青い宝石を弟に盗ませたが、今度は夫をなくした（その死も毒殺かどうか不明である）アデーレが、愛人クルトに去られたくない気持を利用して、生後六ケ月のMichaelをアデーレに盗ませる。赤子はアデーレの別荘に隠されていた。この誘拐は、マリーが一日だけ、ベルリンを離れて、半年の航海から帰ってきたミンゴに会いに行っている間に起った。ミンゴは彼女を助けるためにベルリンへいっしょにくる。子供がいないのに気づいたマリーは、一人でヴィッキーをたずね、彼女と対決するが、撃たれて、傷の手当てのためにヴィッキーの夫の部屋に留まる。

この時もキルシュは冷静な眼で事件を察知し、マリーの子供をとり返してくれた。キルシュはさらに悪質な犯罪計画を知る。ヴィッキーとクルトは、アデーレを殺害して、その遺産となるバーを我がものにしようとたくらんでいた。傷の治療を終えたマリーと、また生活を始めようとしたクル

トは、アデーレが遺産を自分に譲るつもりがないことを見抜く。アデーレは病気だった。自分の先行きが長くないことを知ったアデーレは、ミンゴとマリーの愛にうたれて、二人のためにバーを譲ろうと決心するが、遺書を書こうとした前の夜に殺害される。酒場の騒音の中で殺人が行なわれたので、犯人が分からず、疑いがミンゴにかかった。ミンゴとマリーは逃亡する。

二人は一度刑事キルシュをベルリンの私邸にたずねて話をきき、いろいろと警告をうけたことがあった。二人で子供の行方を探している時であったが、刑事はヴィッキーの悪質さを認めつつも、マリーにも罪があることを指摘した。自分の子供の父親、あるいは育ての親が充分な財産を得られるように、アデーレに遺書を強制した罪であった。マリーはその罪を認める［455］。罪は人が必死に生きようとするぎりぎりの踠きの中で生まれる。二人が帰ったあと刑事は思った。――「罪というものは本当は罪ではない。それは小さなできごとの総決算だ。犯罪人はその結論でしかない――ヴィッキー、クルト、マリー、ミンゴ、ボイヤーラインそしてアデーレ。誰かが罪を犯すのだ。」［458］　ヴィッキーの夫で法律顧問弁護士イグナツ・ボイヤーラインも刑事の頭の中では黒の可能性に入っている。内心妻に愛想をつかしていた彼は果たして、撃たれ傷ついたマリーの枕もとで、「外国に預金がある。二人だけでいつかそこへ行う」［468］とうち明けたのだった。

ミンゴと共に逃亡したマリーは、故郷に近い海岸まできて疲れ、ミンゴと車を後にして、かつて妹を呑み込んだ海に自分も身を投げようとする。「心の中の遠いところで彼女は寄せては返す海の音をきいていた。すると多くの声が荒々しくきこえてきた。」［432］海はこの作品において、いつも避けがたい運命の象徴である。また小説中何回か現れる低地ドイツ語の歌「ノウサギの小さいマッテン」が想起される。兎は狡猾な狐にだまされて最後に食べられてしまう。まさにそうなろうとしたとき、彼女は自分を待つ人影に気づく。アデーレのハーレム（Barはときに Harem とよばれる）を見張るように指示していた刑事キルシュが先まわりしていたのだった。

マリーを車にのせて、彼はミンゴのところへ急ぐ。「彼女は無実なんです。！」と叫んだミンゴに対し、キルシュは犯人逮捕を告げて、うなずく。彼は心の中で思った。――「いかなるマリーも無実ではなかっただろう。もしいつものように、誰かが彼女のような人すべてがもっている秘密を知っていたならば。たまたまある人が知っていた。彼自身が、この女性についていつもよりもっと多くのことを。」[510]

キルシュのこのような感慨とともに小説は終る。誰かがもっと、個々の犯罪者の心の秘密を知ってやれたら社会はもっとよくなるだろう。それは容易にはできないことだ。この作品において、刑事あるいは警察は国家権力機構のマイナス面としてではなく、むしろ肯定的に見られている。刑事は誰よりも、犯罪の社会的原因に精通しているからである。刑事は人間を熟知したモラリストであり、フランスの伝統における啓蒙主義者である。この時代のハインリヒ・マンは司法の批評（Justizkritik）をいくつかのエッセイに発表しており、作品においても「臣下」における訴訟の場面で裁判のあり方を批判した。エッセイの中では「刑事警察」(1931）がこの小説に関して重要である。これは作家が刑事たちを前にして行なった講演であり、講演自体が稀な珍しい事件と思われるが、Kriminalpolizei をSchutzpolizei（保安警察）と対比させて論じている点で注目されよう。

ハインリヒ・マンはこの講演文において、「国家を支える最も大事な柱」としての刑事警察の役目を強調し、その役目の重大さにもかかわらず共和国から十分な財政的援助を受けていないことを批判し、刑事たちの待遇をもう少し改善すべきだと述べている。アレキサンダープラッツにある警察の部屋は、「一時間に60台の列車が10分ごとにひっきりなしに通過するので、夏でも窓をあけられない」状態にあるという。それに比べて、保安警察は、国家を護るためのものとして充分な財政をもち、刑事警察に優先されているのだ。「社会には金持ちも貧乏人もいる。社会は多くの罪と、そしてさらに多くの窮乏を内胞している。」[20] 民衆とともに生きている刑事たちは、「犯される罪を、市民が見るように、害となる事実としてだけ見るので

はなく、その社会的背景を認識している。刑事たちは罪を犯す貧乏人に対して先入観にとらわれていない。」[21] そして「罪が少なくされ、社会は改善される能力をもっている」と信じている。

この小説のキルシュはこのような刑事である。講演文の結論と思われる文章、"Aber ich glaube auch, daβ die Verbrechen verringert werden können, und daβ die Gesellschaft verbesserungsfähig ist."[22]——この文章はそのままキルシュの意見と考えてもまちがいないであろう。社会には逃げ道を通って罪をまぬがれてしまう「合法的な」犯罪もある。それに比べて、認知される犯罪はいつもやむにやまれぬ窮乏から起る。それをよく知っているキルシュはマリーの無実を証明してくれるであろう。

ワイマル共和国は末期的症状を示していたにもかかわらず、ハインリヒ・マンは最後まで共和国の存在を願いそれを改善しようとしていた。その願いはエルケ・ゼーゲルケの言うように、もはや「ユートピア的なモラリスム」[23]でしかなかったのかもしれない。この小説の発表から二年後、文学者の反ファシズム運動の中心的存在となっていたハインリヒは、トーマス・マンに宛てて、「すべてが没落に向かって進んでいるときに、生を賞讃することは無理な期待であった」[24]と述べてワイマル共和国時代の自作のことを回顧している。警察はヒトラーの政権下においては、国家の意志を代行する存在に変貌する。国家が誤った道を走り出したのを、とめようとする者はもはや国内に留まることを許されなかったのであった。〈1991年8月、ケルンにて〉

注)

1) 初版は当時ハインリヒ・マンの全集を刊行中だったベルリンのPaul Zsolnay Verlagから刊行された。

2) Hans-Albert Walter : Deutsche Exilliteratur 1933-1950, Darmstadt 1972, S. 192　本書は1933年4月26日付で、「焚書に価する本」のリストを挙げている。ハインリヒ・マンについては、有名な「ピッポ・スパーノ」を収録している短篇集「フルートと短剣」は例外とされている。

3) Walter A. Berendsohn : Die humanistische Front. Einführung in die deutsche Emigranten-Literatur, Zürich1946, S. 16　本書の記すドキュメント

によると、真夜中ごろゲッベルスが立って演説し、ユダヤ的非ドイツ的精神を攻撃し、新しいドイツ文化のための道をひらくと称して本を火中に投じさせ、その際それぞれの著者への非難の言葉が叫ばれた。

4) Jürgen Haupt : Die Entstehung des Geldes und der Gefühle. Heinrich Manns "Inflationosnvellen" zur Gesellschaftskrise der zwanziger Jahre. In : Heinrich Mann-Jahrbuch 6, Lübeck 1988, S. 52-59　この論文でハウプトは、「コーベス」を中心に、「シュテルニイ」、「赤い靴」、「債権者」の四篇を論じている。いずれも1923—24の作品。

5) Ernst des Lebens　という表現があり、この小説を「きびしい人生」と訳すこともできるが、ヒロイン、マリーのまじめさがテーマとなっているので、このように訳した。

6) Jürgen Haupt : Heinrich Mann, Stuttgart 1980, S. 114

7) a. a. O. s. 114　一例としてハウプトはHugo von Dittberner : Heinrich Mann, Frankfurt 1974　を挙げている。

8) Heinrich Mann an Thomas Mann, Berlin, 26, Nov. 1932 In : Thomas Mann/Heinrich Mann : Briefwechsel 1900-1949, Hg, von H. Wysling, Erweiterte Neuausgabe.
Frankfurt 1984, S. 174　旧版では収録されていなかった書簡である。トーマス・マンがこの作品をどう批評したのか、書簡が残されていないので完全に分からないが、この書簡で読めるかぎりにおいて、トーマスの手紙は、「私の本に関して読める最高にすばらしい表現」であり、それは特に、ヒロイン・マリーの生き方をトーマスが「宗教的」と評したことからきている。ただトーマスには作品の推理小説的な展開に不満が残ったようである。作品の章の構成について、作者は、「第1章の完結した牧歌」が浮き上り、その後の人生が見通しのつかないものになって、それがどう解決したのかが不明になっている点をあげている。

9) Heinrich Mann : Ausgewählte Werke. Hrsg. von Alfred Kantorowicz Bd. X I , Essays I, Berlin 1954, S. 362

10) ネリー・クレーガーは、ベルリンでバーにつとめていた1920年代にハインリヒと知り合い、1939年にニースで結婚するが、1944年に結婚生活5年で亡命先のアメリカで自殺した。46歳であった。生れと育ちの違いのためトーマス・マン一家に迎えられなかったことは知られている。彼女について、例えばトーマス・マンの日記（1940—43）のペーター・ド・メンデルスゾーンによる注は事実を正しく伝えていない。彼女はホルスタイン地方の寒村Ahrenbökで女中をしていた当時未婚のBertha Margaretha Elise Westphalを母として、狭い農家（Kate）で生まれ、父は誰であるか不明であった。漁師の娘とされているのは誤りである。生前の彼女の友人の証言では、父は隣り

村の郵便配達夫であったという。ハインリヒとは二度目の結婚で、初婚のとき自分の名をEmmy JohannaからNellyと改めた。姓の方は母がバルト海に面した町NiendorfでKrögerという名の漁師と結婚したのでKrögerになった。——Heinrich Mann Jahrbuch 4, Lübeck 1986にJ. Seypelが"Wer war Nelly Mann?"と題する論巧を発表し、Ahrenbökの戸籍役場の書類などを参照しておよそ以上のように推論した。

11) Hermann Kesten : Meine Freunde, die Poeten, Frankfurt 1959, S. 38

12) Heinrich Mann : Ein ernstes Leben, Düsseldorf 1961, S. 232　テキストはClaassen版を使用した。以後テキストからの引用は本文中に［　］で示す。この版は旧東独Aufbau版のAusgewählte Werke Bd. 5 Eugénie/Ein ernstes Leben, Hrsg. von A. Kantorowicz, Berlin 1952を底本としている。もう一種、同じAufbau版のGesammelte Werke Bd. 10 Die groβe Sache/Ein ernstes Leben, Hrsg, von S. Anger, Berlin 1972も参照した。1991年5月に出たFischer Taschenbuch版は後者を底本にしている。

13) Heinrich Mann : Essays I a. a. O. S. 361

14) Ulrich Weisstein : Heinrich Mann. Eine historisch-kritische Einführung in sein dichterisches Werk, Tübingen 1962, S.155

15) Heinrich Mann an Thomas Mann. (S. Anm. 8)

16) Ulrich Weisstein (S. Anm. 14)

17) Heinrich Mann : Kurze Handlungsübersicht zu"Ein ernstes Leben", In : Gesammelte Werke Bd. 10, Berlin 1972 S. 570-575　アメリカ亡命中の1940年代に小説の映画化の計画があったらしく、それは実現しなかったが、そのときに書かれたストーリーの要約文である。鉛筆で大判の白紙7頁にわたって書かれたオリジナル資料Nr. 93.をベルリンのHenrich-Mann-Archivでじかに読むことができた。

18) Elke Segelcke : Nachwort. In : Ein ernstes Leben, Frankfurt 1991, S. 281

19) Volker Ebersbachは、"Mutter Marieや"Eugénie"においても、子供への責任感がヒロインの生きる希望になっていることを指摘している。Heinrich Mann. Frankfurt 1978, S.225

20) Die Kriminalpolizei, Vortrag, gehalten vor dem Verband Preuβischer Polizeibeamten. In : Ausgewählte Werke Bd. XII, Essays II, Berlin 1956, S. 223

21) a. a. O. S. 227

22) a. a. O. S. 230

23) Elke Segelcke : Nachwort (S. Anm. 18) S. 288

24) Heinrich an Thomas, Nice, 17. Dez. 1934 In : Briefwechsel (S. Anm. 8) S. 206